

小学校における安全教育プログラム「校内版ひなどり」の実践

○中井 宏、岡 真裕美、臼井 伸之介（大阪大学）

A Practical Report of Safety Education for Elementary School Students; *Hinadori* Programme

Hiroshi NAKAI, Mayumi OKA, & Shinnosuke USUI (Osaka University)

1. はじめに

文部科学省（2010）によれば、学校安全の活動は、安全教育と安全管理、この2つを円滑に進めるための組織活動という3つの主要な活動から構成されている。このうち安全教育は、児童生徒等が自らの行動や外部環境に存在する様々な危険を制御して、自ら安全に行動したり、他の人や社会の安全のために貢献したりできるようにすることを目標としている。これに従えば、安全教育では危険箇所や危険事象を知らしめるだけでなく、危険に対して自身がとるべき適切な対処法を理解しておく必要がある。また、危険をコントロールするための術を他者や社会に向かって発信することのできる人材養成が望まれている。そこで、1. 危険箇所を見つけるだけでなく、事故・負傷の予防に必要な具体的行動目標を自律的にもたせ、実行意図を形成させること、2. その具体的行動目標を、属する集団で共有させることを狙いとした安全教育プログラムを実施した。

学校安全の対象は、地震や津波、火山活動などに対する災害安全、登下校中の交通事故などに対する交通安全、そして犯罪被害を含む日常生活での事件・事故に対する生活安全の3領域がある。

我々の開発した教育プログラムは、いずれの領域にも展開可能であるが、本稿では生活安全に焦点を絞り、さらに児童が日中の長い時間を過ごす学校内での事故予防を目指した教育の経過を報告する。

なお、学校管理下の事故災害に対して災害共済給付を行う独立行政法人日本スポーツ振興センター（2013）の統計によれば、平成24年度に医療費が給付された小学生の負傷・疾病は413,551件である。うち校舎内は204,777件（体育館75,145件、教室66,830件、廊下23,796件など）であり、運動場などの校舎外は164,769件であった。負傷・疾病の軽重が異なる可能性もあるが、通学中の30,682件と比しても、学校内の安全教育を行う意義は大きいと考える。

2. 安全教育の進め方

安全教育は、大阪府内の公立小学校において、4年生児童（2クラス、計64名）を対象に実施した。この際、2クラスは同日同時間帯に同内容の教育を受けた。教育は、著者らが作成したワークシート（図1）を用い、担任教諭が表1の流れに沿って進めた。なお、当該学校では本教育にかかる時間は総合的な学習の時間として扱われた。

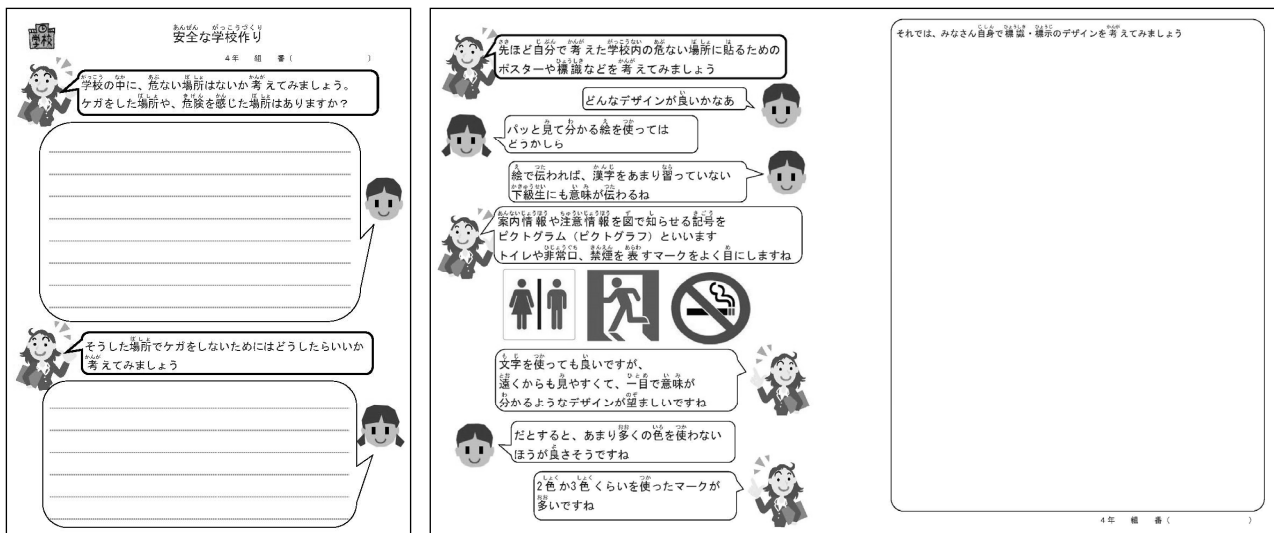


図1：教育に用いたワークシート①（左）と②（右）

表1：校内版ひなどりの流れ

1	1時間目
日	・「最近保健室に行ったのは、どこで何をしていたときだったか」「校内で危険を感じたところはないか」「実際にケガをした場所や状況はないか」を振り返り、ワークシート①に書き込む。 ・各自のワークシートをもとに班(4人1班)に分かれて話し合う(この時、校内のケガが多い場所、状況等を担任教諭から説明)。
	2時間目
	・1時間目の内容をもとに、「そういった危険をさけるために自分たちはどうしたらいいのか、どうしてはいけないのか」について具体的な目標を考え、ワークシート①に書き込む。 ・班で出てきた目標を皆に発表する。 ・ピクトグラムの説明を担任教諭が行った後、班で話し合った行動目標を周知するようなピクトグラムの案を考え、ワークシート②に作画する。
2	3、4時間目
日	・自分が作るピクトグラムを掲示する位置を想定し、大きさを決定する。
目	・図案をもとに、画用紙にマジックで絵を描く。 ・時間が余った児童は、他の作品を新たに作成したり、同じ作品を複数個描く。
3	5時間目
日	・各班1～2作品程度を、皆の前で披露する(クイズ形式でも良い)。
目	・ラミネート加工された自分の作品を自分で掲示する。

3. 安全教育から見えたこと

学校内の負傷事例として、「廊下を走っていてぶつかった」、「うんていの上から飛び降りて転んだ」、「黒板下のチョーク入れで頭をぶつけた」、「机横に掛けている手さげ袋の紐に引っ掛かって転んだ」などが挙げられた。対象の4年生児童は自身の経験も踏まえ、運動場(遊具含む)、廊下、階段、教室、給食室、体育館、プール、玄関など多様な危険を認識する能力を備えていると思われる。

次に、事故・負傷予防のための具体的な行動目標については、「廊下を走らない」、「階段を右側通行する」、「運動場で、こまめに小石を拾っておく」、「ロッカーを整理整頓しておく」「下級生の危険な行為を見たら、注意する」など、「学校内5S活動」と呼べるような意見が出された。

これらをもとに、少なくとも1人に1つ以上、のべ105個のピクトグラム作品(図2に一例を示す)が作られ、児童自身の手で、校舎内の壁や階段の蹴上げ部分、教室のドア、校庭の遊具などに掲示された。

4. おわりに

本稿では、「ひなどり」と名付けた安全教育を報告した。命名の由来は、「標識(ひょうしき)作ってなくそう事故を『どこでどうする?』理解(りかい)して」の頭文字である。周囲の危険を認知する能力や、危険回避行動への内発的動機を高め、他者の安全にも寄与しうる教育であると同時に、人間工学の観点から言えば、

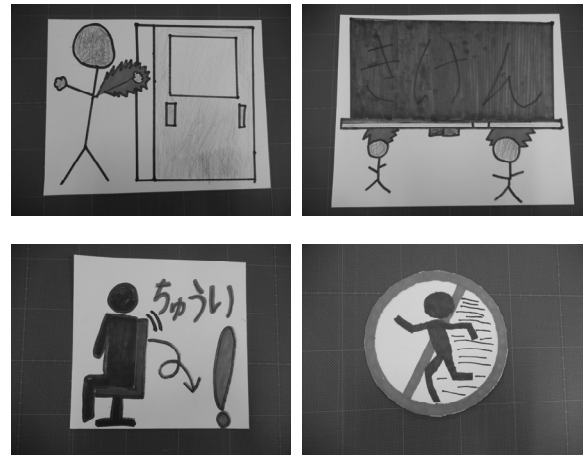


図2：児童が作成したピクトグラム(一例)

ピクトグラムの特性を理解させる内容にもなっている。今後は、教育効果を定量的に評価した上で、学校外の安全に対する展開、さらには他校への普及を進める必要がある。

謝辞・付記

本研究実施に際し、多大なご理解・ご協力をいただいた小学校関係各位に心より感謝申し上げます。なお、本研究は学術研究助成基金助成金(挑戦的萌芽研究)「放任か制限か? —親の養育態度と子どもの事故の関係—(24651189)」の一部として行われた。

参考文献

- 1) 文部科学省：学校安全参考資料「生きる力」をはぐくむ学校での安全教育, 2010
- 2) 独立行政法人日本スポーツ振興センター：学校の管理下の災害〔平成25年版〕, 2013